



## 人生の三角波シリーズ

# 人間到る処 青山あり

第5回

「日英タイムス」の発刊

※三角波：時化た海で方向の違う二つ以上の波が重なってできる三角形の波で、船の舵が取れなくなる危険な状態を言う  
※人間到る処青山あり：死して骨を埋める場所は至るところにある。故郷を出て活躍すべきだとの意。

フォト・ジャーナリストの加藤節雄さんを以前から存じ上げていたが、人生経験をうかがう機会には恵まれずにいた。昨年、加藤さんが日本の文化を英国に紹介されてきた功績で外務大臣賞を受賞され、その際に披露された経歴をぜひもっと詳しくお聞かせいただきたいということでこの対談が実現した。

(センターピープル代表取締役 飯塚忠治)



飯塚 前回では「もうもたない!」という悲鳴のようなものが身体の中から聞こえてきたとのことで、倒れる寸前まで動き通したったようですね。

加藤 もう限界までやったので、フリーランスのフォト・ジャーナリストは辞めてもいいと思いました。あのままでは続かなかったのも確かです。そこで早稲田大学でジャーナリズムの勉強をしたときの夢だった自分の新聞を発行したいという思いが頭をもたげてきました。ロンドンで落ち着いた仕事をしたいという希望とこの思いが重なり、その輪郭が浮かび上がってきたのです。

飯塚 新聞の発行といっても新聞社を立ち上げるわけですから、一定の資本も必要、お金、人、組織がなくてはなりませんよね。その点はどのようにマネージされましたか。

加藤 大学の先輩で、ロンドンで親しくさせていただいているマークス寿子さんに相談しまして、彼女も一緒にやりましょうと賛成してくださり、2人で資本を出し合い1991年6月に「日英タイムス」創刊の運びとなりました。

飯塚 創刊号の紙面から漂うインクの香りがまだ加藤さんの記憶に鮮明に焼きついているのだと思います。「日英タイムス」はどのような編集方針だったのですか。

加藤 一言で言えば、現場主義です。英国の日本人コミュニティの中で起こっていること、在英日本人の生活に役に立つ情報を現場で取材して提供することを中心に置き、他のアドバイザー・ペーパーとは一線を画するという方針でした。自分で自分を評価するのは難しいことはよく承知していますが、読者や知人、取材先からいただくコメントは勇気付けられるものばかりで、日本人社会から温かく受け入れてもらったと思います。が、ことはそう順調には運ばないというのが世の常なのです。一部1ポンド20ペンスの有料新聞としてのスタートだったのですが、有料となるとなかなか売れない。例えばの話ですが、1000部刷っても売れたのは120部とか……。

飯塚 こんなはずではと思っても、走り出していますよね。

加藤 有料新聞として約6カ月間、様々な工夫をしてみました。新聞は和食材小売店の店頭、日本食レストラン、航空会社のカウンター、日本人の立ち寄るお土産屋さんに置かせてもらったのですが、そうしますと集金も頭痛の種になりました。彼らは新聞を置くのは歓迎してくれるのですが、集金までは手がまわらないのです。そこで集金ボックスを置いたり、私自身が自分の車でロンドン中を走り回って新聞の配達や集金をしたり。港を出たら風吹き荒れる中をまさに大きな三角波を被りながらの船出のようなスタートでした。売れない状況のままでは立ちいかないので、半年後には有料新聞からより多くの広告を掲載する無料新聞に方針変更を余儀なくされました。それでも記事内容にこだわり続けて読者、スポンサーのご支援を受けて1991年から11年間、コミュニティ新聞として発行を続けてきたのですが……。

飯塚 「日英タイムス」には身近のことが多く報道されていて、私も一読者として毎回、楽しみにしていましたが、ある日……。

加藤 1998年から始まった金融危機の影響で、「日英タイムス」に入る広告数も減少する中、持ちこたえようと努力をした

鉄道のレールは前に伸びているが、目の前が崖だったら？

ときには崖のような困難を飛び越えつつ、文字通りシベリア横断鉄道を使って英国にやって来たフォト・ジャーナリストの加藤節雄さん。「フリーランスの仕事は決して『フリー』な状況ではないですよ」——1970年代からフリーのジャーナリストとして英国で活躍する加藤さんの半生の紆余曲折を振り返る。全6回シリーズ。

### 加藤 節雄さん プロフィール

1941年……………5月5日端午の節句に東京に生まれる  
1966年……………早稲田大学新聞学科卒業  
1966～69年……………キーストン通信社東京支局でフォト・ジャーナリストとして勤務  
1970～90年……………フリーランス・ジャーナリストとして英国、欧州のニュース・トピックスを日本のメディアに提供  
1991～2002年……………在英邦人向け情報紙「日英タイムス」の編集長として活躍  
現在……………日本クラブ会報「びっくべん」編集長、日本クラブ理事。著書多数



のですが、大きな経済不況の流れの中では限界もありました。そこで2002年にやむなく休刊。私のストレスと肉体的疲労が極限まで高まった時期がこのころだと思います。体調も優れなくなり、今から振り返っても私の人生の中で最も厳しい時期で、荒涼とした嵐の原野を一人で歩いているような感覚だったのを覚えています。休刊となった原因を分析してみれば、独立系の新聞として親会社を持たなかったこと、質の高さにこだわり、ビジネスを継続させる収入の源、広告営業部門に人材投入が十分できなかったことなどが挙げられます。ある友人が私を評して「加藤さんはジャーナリストとしては一流だが、ビジネス経営はどうか？」……なんだか気になる評価でした。

飯塚 その時期は眠れぬ夜ばかりだったことと思います。愛読者ではありましたが加藤さんのご苦勞、今、お聞きするまで何も知りませんでした。お疲れ様でした、ありがとうございます。と、今さらながら申し上げたくなる思いです。

加藤 「日英タイムス」を発行して私が良かったと思えることの中に、20世紀末から21世紀初頭の英国の日本人社会の記録として、大英図書館、日本大使館図書館、ジャパン・ソサエティー図書館、及び日本の国会図書館に全号が保存されたという点があります。



1992年から2002年まで発行された「日英タイムス」

飯塚 100年先に英国の日本人社会の研究者が、これらの図書館の一つで「日英タイムス」を読んでいる姿が目に見えそうな気がします。

本コラムの過去記事は、下記アドレスでご参照いただけます

[www.centrepeople.com/japanese/article](http://www.centrepeople.com/japanese/article)

Presented by

centre people  
Recruitment Consultants

情報を発信し続けるセンターピープルは、人材紹介、派遣のエキスパートです。

誠意をもって心をこめたサービスを企業様、ご登録者の皆様に提供することを常に目指しております。